



2年次科目

必修総合科目

必修専門科目

選択総合科目

選択専門科目

自由科目

教職科目

必修総合科目

英 語 Ⅲ	101
英 語 Ⅳ	102

必修専門科目

微生物学Ⅱ	103
生体物質学Ⅱ	104
酵 素 学	105
代謝生化学	106
生 理 学	107
植物生理学	108
分子細胞生物学Ⅰ	109
遺伝生化学	110
分子遺伝学	111
生物有機化学	112
放射化学	113
分析化学	114
物理化学	115
統計学	116
基礎生命科学実習Ⅱ	117

選択総合科目

スポーツⅡ（体育実技）	119
English and Life Sciences in the USA	120

選択専門科目

分子医科学概論	121
環境衛生学	122
環境汚染源化学	123
応用数学	124
生命と環境の科学	125

自由科目

地学実習	127
生命科学特別演習	128

教職科目

教育原理	129
教育行政学	130
教育課程研究	131
道德教育の研究	132

英語Ⅲ English III

学 年	第2学年	科目分類	必修	前期・後期	前 期	単 位	2
-----	------	------	----	-------	-----	-----	---

担当教員 甲斐 基文（主担当）、萩原 明子、アンドレア リトル、リチャード シュルツ、
半田 純子、内藤 麻緒、野木 園子、西川 玲子、加藤 暁子、藤井 里美、
小林 薫、西 亮太

授業のねらい

英語の運用力を更に高める。以下のクラスを設置。

火曜日：（リスニング／スピーキング）国際学会、国際社会において英語によるLecture及びPresentationを理解することはとても重要です。この授業ではacademic listening skillに焦点をあて、その向上を目標とします。内容はgeneralなものからLife Scienceまで多岐にわたります。

金曜日：（リーディング中心）Academic Englishで書かれた文章を読み、まず人間や動物の行動パターンが、生まれつきの本能と生まれてからの学習にどのように関わっているかを学びます。その後、環境と社会がどのように人々の考え方に影響を与え、その結果、様々な文化圏に住む人々の持つ異なった世界観を、科学の発達を例にとりながら、学んでいきます。

授業内容

火曜日

Lecture Ready 1

回 数	内 容
1～3	Lecture Ready 1 Class Orientation
2～3	Chapter 1 : The First Day in Social Psychology Class
4～6	Chapter 2 : The Pace of a Place
7	Midterm Exam
8～10	Chapter 3 : Business Innovation
11～13	Chapter 4 : Global Business : The Case of MTV
14	Review

金曜日

Exploring Content 2

回 数	内 容
1	Exploring Content 2 Orientation/Chapter 1 : Behavior Understanding Behavior
2～3	Chapter 1 : Behavior Instinctive Behavior and Learned Behavior
4～6	Chapter 2 : Understanding Instinct and Learning Instinct and Learning Compared
7	Midterm Exam
8～10	Chapter 3 : Defining and Exploring Culture The Concept of Culture
11～13	Chapter 4 : Nature Shaping Culture Making the World View Real

成績評価方法：各クラス内での出席率、達成度、参加度、課題、定期試験などにより総合的に判断します。定期試験はListeningとReadingのそれぞれのセクションで中間試験と期末試験が行われます。成績評価の詳細は授業の初めに配られるガイドブックを参照すること。

教 科 書：火曜日：Lecture Ready 1: Strategies for Academic Listening, Note-taking, and Discussion by Sarosy, P. and Sherak, K. (Oxford)
金曜日：Exploring Content 2 by Smith, Lorraine C. (Longman)

オフィスアワー：甲斐教授（火曜日）13:00～14:00
萩原准教授（火曜日）11:50～13:00

英語Ⅳ English IV

学 年	第2学年	科目分類	必 修	前期・後期	後 期	単 位	2
担当教員	甲斐 基文 (主担当)、萩原 明子、アンドレア リトル、リチャード シュルツ、半田 純子、内藤 麻緒、野木 園子、西川 玲子、加藤 暁子、藤井 里美、小林 薫、西 亮太						

授業のねらい

英語Ⅲに準ずる。

授業内容

火曜日

Lecture Ready 1

回 数	内 容
1～3	Lecture Ready 1 Chapter 5 : Celebrities and the Media (B)
4～6	Chapter 6 : Communication Revolutions
7	Review
8	Midterm Exam
9～11	Chapter 7 : How Sleep Affects Thinking
12～14	Chapter 8 : The Influence of Geography on Culture

金曜日

Exploring Content 2

回 数	内 容
1～3	Exploring Content 2 Chapter 5 : The Birth of Modern Science The Aristotelian Origins of Western Scientific Beliefs The 17th Century Scientific Revolution
4～6	Chapter 6 : Science and a New World View Galileo Galilei's Astronomical Observations
7	Review
8	Midterm Exam
9～11	Life Sciences 1
12～14	Life Sciences 2

成績評価方法：各クラス内での出席率、達成度、参加度、課題、定期試験などにより総合的に判断します。定期試験はListeningとReadingのそれぞれのセクションで中間試験と期末試験が行われます。成績評価の詳細は授業の初めに配られるガイドブックを参照すること。

教 科 書：火曜日：*Lecture Ready 1: Strategies for Academic Listening, Note-taking, and Discussion* by Sarosy, P. and Sherak, K. (Oxford)
金曜日：*Exploring Content 2* by Smith, Lorraine C. (Longman) + Handouts

オフィスアワー：甲斐教 授 (火曜日) 13:00～14:00
萩原准教授 (火曜日) 11:50～13:00

微生物学Ⅱ Microbiology II

学 年	第2学年	科目分類	必 修	前期・後期	前 期	単 位	1.5
担当教員	藤原 祥子、時下 進一						

授業のねらい

微生物を材料として発展した遺伝学について詳細な解説を行い、微生物学の先端的な研究を理解しうる学力を養う。大腸菌を材料として解明されてきた複製、転写、翻訳の分子機構を学び、その後、バクテリオファージの感染及び増殖、組み換え、変異、DNA損傷の修復、遺伝子の発現調節の分子機構についての知見を教授する。

授業内容

回 数	担 当	項 目	内 容
1～3	藤原 祥子	1. 遺伝情報の伝達と発現 (細菌)	原核生物の複製、転写、翻訳に関わる因子と分子機構について解説する。
4	//	2. 遺伝情報の伝達と発現 (バクテリオファージ)	M13ファージ、λファージ、T系ファージの生活環等について解説する。
5～6	//	3. 遺伝子の伝達と発現	微生物における遺伝子交換 (形質転換、形質導入、接合) の機構について詳細に解説する。
7	//	4. 遺伝子工学とバイオテクノロジー	遺伝子組み換え技術、塩基配列決定法、PCR等について解説する。
8	時下 進一	5. 遺伝子の変異と修復 (1)	変異原の種類と作用機構、突然変異の種類、突然変異による表現型の変化、条件致死変異、サプレッサー変異等について解説する。
9	//	遺伝子の変異と修復 (2)	変異の修復機構 (直接修復、除去修復、組み替え修復、SOS修復) について解説する。
10～11	//	6. 変異株の選択と解析	様々な変異株の濃縮法、対抗選択、レプリカ法等について解説する。また微生物における遺伝子交換を利用した遺伝子解析法について解説する。
12～13	//	7. 微生物の代謝調節 (1)	酵素活性の調節 (フィードバック阻害、酵素の修飾により調節など) について解説する。また、ラクトースオペロン、トリプトファンオペロンの調節機構を例にとり、転写調節の分子機構を解説する。
14	//	8. 微生物の代謝調節 (1)	ラムダファージの溶菌サイクルと溶原化サイクルの切り替えの分子機構を例にとり、抗転写終結や遺伝子発現の分子機構について解説する。

成績評価方法：学期末試験による。

教科書：微生物学 (青木健次、編著) 化学同人

参考書：微生物学 [上] スタニエラ著書高橋ら訳、培風館、ヴォート基礎生化学第2版、田宮ら訳、東京化学同人

オフィスアワー：時下 進一 金曜日 (17:00～18:00) 環境分子生物学研究室

生体物質学Ⅱ Chemistry of Biomolecules II

学 年 第2学年 科目分類 必修 前期・後期 後 期 単 位 1.5

担当教員 柳 茂

授業のねらい

生体物質学Ⅱでは代謝生化学に引き続き、脂質代謝、アミノ酸代謝および栄養学について、それらの構造と機能および反応経路について解説し、生物を構成する物質の基本的な理解をはかる。

授業内容

回 数	項 目	内 容
1～6	脂質代謝 (1) 脂質代謝 (2) 脂質代謝 (3)	脂質の消化と吸収、脂肪酸の酸化、ケトン体について解説する。 脂肪酸の生合成、脂肪酸代謝の調節について解説する。 コレステロール、アラキドン酸、リン脂質と糖脂質の代謝について解説する。
7～12	アミノ酸の代謝 (1) アミノ酸の代謝 (2) アミノ酸の代謝 (3)	アミノ酸の代謝および尿素サイクルについて解説する。 アミノ酸の生合成について解説する。 窒素固定について概説する。
13	エネルギー代謝の組織化と臓器分業	代謝の臓器、器官での分業、代謝の適応について解説する。さらに栄養学的解説をする。
14	まとめ	

成績評価方法：主として期末テストによる。

教科書：ヴォート基礎生化学 D.ヴォート、J.G.ヴォート、C.W.プラット著 東京化学同人

参考書：ハーパー・生化学 上代淑人監訳 丸善
分子生物学講義中継 井出利憲著 羊土社

オフィスアワー：講義終了後 分子生化学研究室教授室

教員からの一言：代謝には数多くの酵素反応が関与しています。それぞれの反応が代謝全体の流れの中でどういう意味を持つのかを理解するように心がけてください。

酵素学 Enzymology

学 年	第2学年	科目分類	必修	前期・後期	後 期	単 位	1.5
-----	------	------	----	-------	-----	-----	-----

担当教員 井上 英史

授業のねらい

生命現象の主たる担い手はタンパク質であり、タンパク質は独自の立体構造を形成することによって機能を生み出している。タンパク質や酵素の構造やメカニズム、調節機構を理解することは、生命の仕組みを理解する上で重要であり、また、創薬へと展開しうることである。そこで、最初にタンパク質の三次元構造に見られる特徴や構造の形成要因について学ぶ。また、いくつかの機能性タンパク質を例として、構造と機能の関連を理解する。次に酵素の基本的事項と触媒機構を整理し、いくつかの具体例を通して理解する。最後に、酵素の触媒機構を知る上で重要な反応速度論について学ぶ。

授業内容

回 数	項 目	内 容
1	タンパク質の三次元構造	ペプチド結合の構造的特徴、タンパク質構造の階層性、ポリペプチドのコンホメーションを制限する要因、ラマチャンドラン・ダイアグラム。
2	タンパク質の三次元構造	α ヘリックスと β シートの特徴、規則的二次構造と不規則二次構造、繊維状タンパク質の構造。
3	タンパク質の三次元構造	タンパク構造決定法としてのX線結晶解析とNMR、側鎖の位置と極性の関係、タンパク構造に共通するモチーフ、PDB。
4	タンパク質の三次元構造	複数のサブユニットでタンパクを構成することの利点、タンパクを安定化する力、AnfinsenによるRNアーゼAの実験、タンパクのフォールディングにおけるエネルギー変化とエントロピー変化、シャペロンの役割、アミロイド繊維。
5	タンパク質の機能	ミオグロビンとヘモグロビンの酸素結合における違い（協同性と構造の観点から）、アロステリック相互作用。
6	タンパク質の機能	ヘモグロビンにおけるボーア効果とBPGの生理的意義、鎌状赤血球貧血とマラリアの関係。抗体のドメイン構造と多様性。
7	タンパク質の機能	筋肉の収縮のメカニズム。
8	酵素触媒	酵素触媒と他の化学触媒の違い、酵素の特異性に影響する因子、補因子の役割、補因子、補酵素、共同基質、補欠分子族の違い、触媒の有無による反応の違い（反応座標による説明）、反応の自由エネルギー変化、活性化自由エネルギー。
9	酵素触媒	酸塩基触媒、共有結合触媒、金属イオン触媒、静電触媒、近接効果、配向効果、非酵素触媒が遷移状態優先結合で動かない理由。
10	酵素触媒	リゾチームの触媒機構。
11	酵素触媒	セリンプロテアーゼの触媒基トリオの役割、オキシアニオンホールの役割、タンパク分解酵素をチモーゲンとして生合成する利点。
12	酵素の反応速度論、阻害、調節	一次、および二次の速度式、酵素の瞬間速度、初速度、最高速度の違い、ミカエリス・メンテン式を導く。ミカエリス定数の意味。
13	酵素の反応速度論、阻害、調節	ラインウィーバー・パーク式とその特徴、二基質酵素反応における定序機構、ランダム機構、ピンポン反応、競合阻害。
14	酵素の反応速度論、阻害、調節	競合阻害、反競合阻害、混合阻害の違い。酵素活性のアロステリック調節。

成績評価方法：主として学期末試験による。

教科書：ヴォート基礎生化学（第3版）D、ヴォートら著、田宮ら訳 東京化学同人

オフィスアワー：火曜日（17:00～18:00）基礎生命科学研究室

教員からの一言：講義で使用する資料をCodexで配布する。また、講義内容に関する問題をCodexで配布するので、予習し講義の理解に役立てて下さい。単位取得に要する到達度は、その問題に対して6割正解できるレベル。

Ⅱ
2
年
次
科
目

必修
総合
科目

必修
専門
科目

選択
総合
科目

選択
専門
科目

自由
科目

教職
科目

代謝生化学 Biochemistry of Metabolism

学 年 第2学年 科目分類 必修 前期・後期 前期 単 位 1.5

担当教員 多賀谷 光男

授業のねらい

代謝とは、生体系が各種の活動を行うために必要な自由エネルギーを取り入れて利用する全過程を指す。代謝の目的は次の4つである。

- 1) 食物や太陽光からエネルギーを獲得する。
- 2) 外部からの栄養物を生体高分子成分の前駆体に変換する。
- 3) これらの素材を集めてタンパク質、核酸、脂質、多糖などの各種生体成分を合成する。
- 4) 細胞が必要とする種々の生理活性物質を合成し分解する。代謝は一連の連続した酵素反応と多くの化学的中間体を經由して進行する。本講義では、主に動物細胞でのこれらの反応について解説し、生体内での物質及びエネルギーの流れを理解することを目的とする。

授業内容

回 数	項 目	内 容
1	序	講義の目的と代謝経路について概説する。
2	代謝エネルギー論 (1)	高エネルギー化合物について解説する。
3	代謝エネルギー論 (2)	代謝における酸化還元反応について解説する。
4	グルコースの異化代謝 (1)	解糖経路とその調節機構について解説する。
5	グルコースの異化代謝 (2)	発酵について解説する。
6	グルコースの異化代謝 (3)	グルコース以外のヘキソース代謝およびペントースリン酸経路について解説する。
7	グリコーゲン代謝 (1)	グリコーゲンの合成と分解について解説する。
8	グリコーゲン代謝 (2)	グリコーゲンの合成と分解の調節機構について解説する。
9	糖新生	糖新生の経路とその調節機構について解説する。
10	クエン酸サイクル (1)	クエン酸サイクルの概要および各酵素について解説する。
11	クエン酸サイクル (2)	クエン酸サイクルの調節機構について解説する。
12	電子伝達と酸化的リン酸化 (1)	ミトコンドリアの構造と機能について解説する。
13	電子伝達と酸化的リン酸化 (2)	電子伝達について解説する。
14	電子伝達と酸化的リン酸化 (3)	酸化的リン酸化およびATP生産の制御について解説する。

成績評価方法：主として学期末試験による。

教科書：ヴォート基礎生化学 田宮信雄、村松正實、八木達彦、遠藤斗志也 訳 東京化学同人

参考書：ハーパー・生化学 上代淑人、清水孝雄 監訳 丸善

オフィスアワー：毎週木曜日 (13:00 ~ 14:00) 分子細胞生物学研究室教授室

教員からの一言：代謝には数多くの酵素反応が関与しています。それぞれの反応が代謝全体の流れの中でどういう意味を持つのかを理解するように心がけてください。

生理学 Physiology

学 年	第2学年	科目分類	必 修	前期・後期	前 期	単 位	1.5
担当教員 宮川 博義							

授業のねらい

我々の生命は、神経系、循環系、消化吸収系、免疫系、内分泌系、といった幾つものシステムが有機的に働くことによって、我々を取り巻く環境の中に可能となり、維持されている。本講義の目的は、次の三点を通して生命現象を理解する事にある。

1) 分子レベルの機能が、細胞、器官、システムレベルで組み合わさって生命を可能にしているということ。2) 構成要素の単なる寄せ集めではなくシステムとしての統合が必要だということ。3) 生理機能は、特定の外部環境を前提条件としているのだということ。半期の講義であるので主として「生体内恒常性維持」に関わる内容を講義する。

授業内容

回 数	項 目	内 容
1	生理学の概要	生体の基本的デザインと生体内恒常性維持の概念を解説
2	細胞の基本構造と物質移動	細胞の構造、環境、物質移動を解説
3	細胞の一般的応答	細胞内情報伝達過程の概説
4	細胞の特殊な応答 (1)	細胞興奮、シナプス伝達および分泌機序を解説
5	細胞の特殊な応答 (2)	筋細胞の構造と筋収縮の機序を解説
6	中間試験	
7	末梢自律神経系	神経性の生体調節系を解説
8	血液・心臓・循環	体内で物質を循環させるシステムについて解説
9	消化系	体外から体内へ三大栄養素を吸収する機序を解説
10	呼吸系	酸素を体内に取り込み、体外に二酸化炭素を排泄するシステムを解説
11	排泄系	体液の組成を調節するシステムを解説
12	内分泌系	液性の生体調節系を解説
13	生殖機能	生殖機能をホルモンとの関わりを重視して解説
14	総復習	

授業で行っている工夫：予習のため、次の講義の内容に関する課題のプリントを配布し、次回の講義時に提出してもらいます。

成績評価方法：学期末試験により評価する。

教科書：オックスフォード生理学 丸善 9800円

参考書：標準生理学第6版 医学書院 なんでも書いてある 12600円
ギャノン生理学 第22版 丸善 なんでも書いてある 10500円
からだの構造と機能 西村書店 コメディカル向け 4800円

オフィスアワー：前期、金曜日 (13:00 ~ 15:00) 脳神経機能学研究室

教員からの一言：試験前にまとめて勉強するのではなく講義中に理解するようにしてください。

植物生理学 Plant Physiology

学 年 第2学年 科目分類 必修 前期・後期 後 期 単 位 1.5

担当教員 都筑 幹夫 (主担当)、佐藤 典裕

授業のねらい

植物は、例えば稲や作物等、食料になると同時に、木材やパルプ等の原料として各種産業に利用される。植物生理学とは、人類の生存に不可欠な植物に関して、生命現象とそのメカニズムを理解するための学問である。本講義では、前半は生活環を中心にした生理現象とそのメカニズムに関して、後半は、主に栄養生長時における生化学的、分子生物学的側面として植物の代謝について解説する。

授業内容

回数	担当	項目	内容
1	都筑	分類と構造	植物の分類と形態について解説する。
2	//	生長と分化 (1)	種子の発芽、茎や葉における細胞伸長について解説する。
3	//	生長と分化 (2)	花芽の形成過程とその調節機構について解説する。
4	//	生長と分化 (3)	老化と落葉のメカニズムについて解説する。
5	//	植物ホルモン	オーキシンやジベレリンなどのホルモンについて解説する。
6	//	植物バイオテクノロジー (1)	不定根と不定胚、組織培養、遺伝子導入法について説明する。
7	//	環境応答	比較的はやい環境応答 (気孔の開閉、ストレス応答、光走性、走化性など) について解説する。
8	//	光合成 (1)	光受容とエネルギー変換のしくみについて解説する。
9	//	光合成 (2)	炭素固定回路とその多様性、及び調節機構について解説する。
10	//	植物の遺伝子とタンパク質合成	核と葉緑体DNAにコードされている光合成関連遺伝子とそのタンパク質合成について解説する。
11	佐藤	栄養塩	植物の生育に必要な栄養元素類とその役割について解説する。
12	//	代謝 (1)	窒素代謝 (窒素固定やアミノ酸の合成等) について解説する。
13	//	代謝 (2)	硫黄代謝 (硫黄含有アミノ酸の合成等) とリン代謝 (核酸の合成等) について解説する。
14	//	植物バイオテクノロジー (2)	遺伝子組換えを利用したストレス耐性付与、あるいは有用物質生産能付与等の例を解説する。

授業で行っている工夫：プリントやパワーポイント、OHCなどを用いて、植物を広く分子レベルで理解するように解説する。動物と異なる点だけでなく、共通点を知ってもらうようにする。

成績評価方法：主として、学期末試験により成績評価を行なう。

教科書：光合成の部分はヴォート基礎生化学の18章。それ以外の部分に関しては定めない。

参考書：「現代生命科学の基礎」都筑幹夫編 教育出版
植物生理学 モアー、シェーファー著 シュプリンガー・フェアラーク東京

オフィスアワー：都筑 幹夫 後期、火曜日 (13:10 ~ 14:00) その他も随時可 環境応答生物学研究室
佐藤 典裕 後期、水曜日 (13:00 ~ 14:00) 環境応答生物学研究室

教員からの一言：前半は教科書なしで講義を理解することに重点を置き、後半では光合成や代謝に関して高度な知識と捉え方を身につけるように努めて欲しい。

分子細胞生物学 I

Molecular Cell Biology I

学 年	第2学年	科目分類	必修	前期・後期	後 期	単 位	1.5
担当教員	多賀谷 光男						

授業のねらい

細胞は、脂質とタンパク質から構成された細胞膜によって外界から隔離されており、この膜を通じて外界と物質のやり取りを行っている。細胞の形や大きさは生物によって大きく異なっており、核を持たない細胞（前核細胞）は直径1～10 μ mしかなく、細胞の中には特別なオルガネラは存在しない。一方、核を持つ真核細胞は前核細胞よりも10倍程度大きく、核以外にも小胞体、ゴルジ体、ミトコンドリアなどの膜によって囲まれたオルガネラを持っている。分子細胞生物学 I では動物細胞の構造とオルガネラの機能について講義する。

授業内容

回 数	項 目	内 容
1	序	分子細胞生物学 I のための序論。細胞について概説する。
2	顕微鏡 (1)	光学顕微鏡と蛍光顕微鏡の原理およびそれらの細胞生物学における利用法を解説する。
3	顕微鏡 (2)	細胞生物学の研究に用いられる電子顕微鏡の手法について解説する。
4	細胞培養	細胞の培養方法およびオルガネラの単離方法について述べる。
5	生体膜	細胞膜の流動モザイクモデルを解説する。
6	膜タンパク質	膜タンパク質がどのようにして生体膜に定着するのかについて解説する。
7	輸送 (1)	低分子化合物の細胞内外への輸送の形態について説明する。
8	輸送 (2)	運搬体タンパク質およびチャネルタンパク質について解説する。
9	オルガネラ (1)	真核細胞の様々なオルガネラについて概説する。
10	オルガネラ (2)	核へのタンパク質輸送機構について解説する。
11	オルガネラ (3)	ミトコンドリアへのタンパク質輸送機構について解説する。
12	分泌 (1)	小胞体膜の透過機構およびゴルジ体からのタンパク質の輸送機構について解説する。
13	分泌 (2)	タンパク質および神経伝達物質のエクソサイトーシスについて解説する。
14	エンドサイトーシス	コレステロールなどを例にとり、エンドサイトーシスについて解説する。

成績評価方法：主として学期末試験による。

教 科 書：分子細胞生物学 多賀谷光男著 朝倉書店

参 考 書：細胞の分子生物学（第5版）B.アルバーツ他著 ニュートンプレス
分子細胞生物学（第5版）H.ロディッシュ他著 東京化学同人

オフィスアワー：毎週木曜日（13:00～14:00） 分子細胞生物学研究室教授室

教員からの一言：内容は高度なので1年次の講義の理解が不十分であると本講義の理解は難しい。教科書をしっかり読み、単なる暗記ではなく、細胞機能の合理性を理解しながら記憶することを心掛けることが重要である。

II
2年次科目

必修総合科目

必修専門科目

選択総合科目

選択専門科目

自由科目

教職科目

遺伝生化学 Biochemical Genetics

学 年 第2学年 科目分類 必修 前期・後期 前期 単 位 1.5

担当教員 田中 弘文 (主担当)、横堀 伸一

授業のねらい

核酸の構造と化学的性質、遺伝子の構造および転写と翻訳の分子機構について、核酸の生理的役割と関連させながら深く、且つ正確な理解を養うことを目的とする。

授業内容

回数	担当	項目	内容
1	田中	核酸の構造 (1)	DNAのらせん構造、柔軟性、スーパーコイルとトポイソメラーゼなどについて解説する。
2	//	核酸の構造 (2)	核酸構造を安定化する力、核酸の分画法、制限酵素、DNAシークエンシング法等について解説する。
3	//	核酸の構造 (3)	DNAとタンパク質の相互作用について、制限酵素、転写因子を例に解説する。
4	//	核酸の構造 (4)	真核生物の染色体の構造について解説する。
5	//	転写 (1)	原核生物における転写について解説する。
6	//	転写 (2)	真核生物における転写について解説する。
7	//	転写 (3)	転写後のmRNAのプロセッシングについて解説する。
8	//	転写 (4)	転写後のrRNA、tRNA プロセッシングについて解説する。
9	//	転写制御	原核生物における遺伝子発現調節について解説する。
10-11	横堀	翻訳 (1)	遺伝暗号、tRNA、アミノアシルtRNA合成酵素等について解説し、遺伝暗号解読メカニズムについて解説する。
12-13	//	翻訳 (2)	リボソームの機能と構造について解説する。それに基づき、翻訳の開始、鎖延長、終結について、真正細菌を例にとりて解説する。
14	//	翻訳 (3)	真核生物の翻訳について解説する。

成績評価方法：授業中に行なう小テストと学期末試験による。

教科書：ヴォート基礎生化学 第3版、田宮ら訳、東京化学同人

参考書：細胞の分子生物学 第5版、B.Albertsら著、中村佳子・松原謙一監修、ニュートンプレス

オフィスアワー：田中 前期、水曜日 (17:00 ~ 19:00) 細胞制御医科学教授室

横堀 特にもうけない。 予定を7階細胞機能学研究室で確認して下さい。

教員からの一言：生物学、微生物学 I、生体物質学 I の内容を良く復習しておいて下さい。

また一回の講義内容がかなり多いので、毎回良く復習して理解に努めて下さい。

分子遺伝学 Molecular Genetics

学 年	第2学年	科目分類	必 修	前期・後期	後 期	単 位	1.5
担当教員	深見 希代子						

授業のねらい

遺伝とは形質が親から子へ伝えられ、その結果としてすべての生物は祖先に似ることである。本講義では、分子レベルで遺伝を理解することを目標とする。そのため、DNA複製機構、突然変異とDNA修復、組み換えの機構やヒトゲノムなどの遺伝子の構造などを学ぶ。本講義の理解は生命現象の基礎的理解に必須であると考えられることから、積極的な勉学を期待する。

授業内容

回 数	内 容
1	分子遺伝子とは、遺伝子の実体
2	メンデルの遺伝学、遺伝子と病気
3～4	塩基、ヌクレオチドの代謝
5～6	DNA複製：DNA複製の原則、原核生物のDNA複製
7～9	DNA複製：真核生物のDNA複製、原核生物との違い
10～12	突然変異と修復：突然変異原と変異の種類、DNA修復、組み換えの機構
13	遺伝子の構造：真核生物、ヒトのゲノムの構造
14	多様な遺伝子、遺伝子発現の制御

成績評価方法：主として学期末試験により成績評価を行う。

教科書：ヴォート基礎生化学、東京化学同人

参考書：分子生物学イラストレイテッド、羊土社

オフィスアワー：毎週月曜日 13:00～14:00 ゲノム情報学研究室

Ⅱ
2
年
次
科
目

必
修
総
合
科
目

必
修
専
門
科
目

選
択
総
合
科
目

選
択
専
門
科
目

自
由
科
目

教
職
科
目

生物有機化学 Bioorganic Chemistry

学 年 第2学年 科目分類 必修 前期・後期 前期 単 位 1.5

担当教員 伊藤 久央

授業のねらい

生体はその構造や機能を維持するためにさまざまな有機化学反応を利用して必要な有機化合物を作り出している。本講義では生体内での物質変換を理解するために不可欠なカルボニル化合物の反応を一年次の有機化学の内容を基礎にして学ぶ。

授業内容

回 数	項 目	内 容
1	序論	カルボニル化合物の性質と反応性
2	アルデヒドとケトン 1	アルデヒドとケトンの性質
3	アルデヒドとケトン 2	アルデヒドとケトンの反応
4	カルボン酸 1	カルボン酸の命名法、構造、物理的性質、カルボン酸の解離と酸性度
5	カルボン酸 2	カルボン酸の酸性度と置換基効果、カルボン酸の反応と合成
6	カルボン酸誘導体と求核アシル置換反応 1	カルボン酸誘導体の構造、性質、求核アシル置換反応の基本的な反応性と反応機構
7	カルボン酸誘導体と求核アシル置換反応 2	カルボン酸誘導体の合成と反応
8	カルボニルの α 置換反応 1	ケト-エノール互変異性、エノラートイオンの生成機構
9	カルボニルの α 置換反応 2	エノラートイオンの反応性と関連諸反応
10	カルボニルの縮合反応 1	カルボニル縮合反応の一般的反応機構
11	カルボニルの縮合反応 2	アルドール反応と関連諸反応
12	カルボニルの縮合反応 3	クライゼン縮合と関連諸反応、生体内で起こるカルボニル縮合反応
13	脂肪族アミン	脂肪族アミンの構造、物理的性質、アミンの窒素原子の求核性と塩基性
14	復習	

成績評価方法：主として学期末試験の結果をもとに成績評価を行う。

教科書：有機化学（中・下）第7版 マクマリー著 伊東・児玉ほか訳 東京化学同人

参考書：ベーシック薬学教科書シリーズ 有機化学 夏刃、高橋編 化学同人
困ったときの有機化学 D.R.クライン著 化学同人

オフィスアワー：特に指定しない。質問はいつでも歓迎します。 生物有機化学研究室

教員からの一言：講義内容は密接に絡み合っているため、毎回の講義内容をよく理解していないと次の講義内容が理解しにくくなります。復習をして講義内容の理解に努めるとともに、わからない部分は気軽に質問して下さい。

放射化学 Radiochemistry

学 年	第2学年	科目分類	必修	前期・後期	前 期	単 位	1.5
担当教員	藤原 祥子、井上 弘樹						

授業のねらい

放射性同位元素や放射線を用いた技術は、自然科学の各分野において、基本的な技術の一つとして広く利用されている。ライフサイエンスの分野においても、放射性同位元素はトレーサー（標識体）として、また照射用線源として利用され、その発展に大きな役割を果たしている。本講義では、ライフサイエンスにおいて放射性同位元素を利用するための物理学的および化学的基礎知識を習得する事を目的とする。また同時に、第一種放射線取扱主任者試験に合格しうる学力を養成することをめざす。

授業内容

回数	担当	項目	内容
1	藤原 祥子	序	放射化学の講義の目的を説明する。放射能の発見などRIの歴史についても概説する。
2	//	RIの利用	RIの製造・供給と利用、放射線測定技術などの現状について説明する。
3	井上 弘樹	原子核と放射線（1）	α 線、 β 線、 γ 線、X線について概説する。
4	//	原子核と放射線（2）	α 壊変、 β 壊変、 γ 壊変、自発核分裂などの放射性壊変について述べ、壊変の法則について説明する。
5	//	放射線と物質の相互作用（1）	重荷電粒子、電子、光子、中性子と物質との相互作用について説明する。
6	//	放射線と物質の相互作用（2）	放射線の指数減衰、放射線エネルギーの物質への伝達について解説する。放射線に関する量と単位についても概説する。
7	//	天然に存在する放射性核種	系列を構成する天然放射性核種、系列を構成しない天然放射性核種、誘導天然放射性核種について説明する。
8	//	放射性核種の原子数と放射能の経時変化	単純な壊変、分岐壊変、逐次壊変について説明する。さらに、逐次壊変のうち放射平衡が成り立つ場合について考察する。
9	藤原 祥子	教育・訓練（1）	9～14回の講義は放射線取扱者に対する教育・訓練にあてる。放射線の人体への影響について説明する。
10	//	教育・訓練（2）	RIあるいは装置の安全取扱1（基礎）について説明する。
11	//	教育・訓練（3）	安全取扱2 非密封RI取扱時の主な実験操作法を具体的に説明する。
12	//	教育・訓練（4）	安全取扱3 ライフサイエンスにおける安全取扱について具体例をあげて説明する。
13	//	教育・訓練（5）	RI及び放射線発生装置による放射線障害の防止に関する法令について説明する。
14	井上 弘樹	教育・訓練（6）	放射線障害予防規定について説明する。

授業で行っている工夫：必要に応じて資料配布、小テストを行います。

成績評価方法：主として学期末試験により成績評価を行う。

教科書：6版 放射線取扱の基礎－第一種放射線取扱主任者試験の要点－ 日本アイソトープ協会 丸善書店

オフィスアワー：藤原 祥子 月曜日（18:00～19:00）環境応答生物学研究室
井上 弘樹 木曜日（17:00～19:00）、その他随時 分子細胞生物学研究室

教員からの一言：昨年は2年生からも第一種主任者試験に合格する人が出ました。難しい試験ですが皆さんもぜひチャレンジしてみてください。

分析化学 Analytical Chemistry

学 年 第2学年 科目分類 必修 前期・後期 前期 単 位 1.5

担当教員 藤原 祺多夫

授業のねらい

生体、環境試料などの構成物質、微量含有物質の測定は、今日欠くことのできないものである。分析化学は、水溶液中の化学平衡、化学特性を定量的に説明するものであるが、本講義では、化学的な基礎部分は省略し、実際に使用する測定装置の原理を中心に解説すると共に、その実際的な応用について説明する。とくにエネルギーと物質の相互作用からどのような情報が得られるかという観点から機器分析法を分類し、また応用性の高いものを取り上げた。

授業内容

回 数	内 容
1	講義の概要解説（生命科学における分析化学）
2	機器分析の基礎（試料の前処理、サンプリング、得られたデータの解析（信頼性））
3	紫外・可視吸光分析（その1）
4	紫外・可視吸光分析（その2）
5	蛍光分析
6	原子スペクトル分析
7	赤外・ラマンスペクトル分析
8	核磁気共鳴分析
9	電子スピン共鳴分析
10	X線分析
11	分光分析のまとめ（レーザーなどを用いる特殊な分析）
12	電気分析
13	クロマトグラフィーと電気泳動（その1）
14	クロマトグラフィーと電気泳動（その2）

授業で行っている工夫：現代の生命科学は、その手法において、ほとんどこの授業で解説された内容に基づくものである。できるだけ分かりやすく解説を行う

成績評価方法：期末試験

教科書：機器分析入門 赤岩英夫編 裳華房

オフィスアワー：月曜日 15:00～16:00、火曜日 10:00～11:00 環境衛生化学教授室

教員からの一言：教科書を使うが、板書も重要である。試験は、板書内容を中心とする。

物理化学 Physical Chemistry

学 年	第2学年	科目分類	必修	前期・後期	後 期	単 位	1.5
担当教員 玉腰 雅忠							

授業のねらい

物理化学は、数学を道具として物理的な思考方法を化学現象に応用するものである。生物が化学物質から成り立ち、生命現象が化学反応の連続であるからには、物理化学的素養は生命科学を志す者にとって不可欠である。本講義では主に化学反応のエネルギーを扱う熱力学、および化学反応の速度論などを学ぶ。

授業内容

回 数	項 目	内 容
1	結合のイオン性と分子間に働く力	イオン結合、分子間相互作用、結合距離と結合エネルギー
2	分子の集団	理想気体の状態方程式、理想気体の分子運動、実在気体の状態方程式
3	気体の中の分子運動	分子の衝突、運動の自由度とエネルギーの分類、振動・回転・並進のエネルギー
4	分子のエネルギー分布	分子の速度分布、ボルツマン分布、分配関数
5	演習	
6	物質の熱的性質とエネルギー	熱と仕事、熱力学第一法則、化学反応とエンタルピー
7	物質の熱的性質とエントロピー	熱力学第二法則、カルノーサイクル
8	物質の自由エネルギーと化学平衡	ギブズ自由エネルギー、自由エネルギーと化学平衡
9	演習	
10	化学反応の速度	反応速度、素反応と複合反応、反応速度定数と反応次数、反応次数と素反応の機構
11	反応速度の理論	アレニウスの式、遷移状態理論、化学反応のポテンシャルエネルギー曲面
12	複合反応	可逆反応、並列反応、逐次反応、定常状態近似、可逆反応と逐次反応からなる複合反応
13	さまざまな化学反応	光化学反応、触媒反応、連鎖反応、単分子反応機構、溶液中の化学反応
14	演習	

成績評価方法：主として期末試験により評価する。

教科書：「ベーシック物理化学」（原 公彦・米谷 紀嗣・藤村 陽 著）化学同人

参考書：「アトキンス 物理化学要論 第4版」（Atkins, de Paula 著、稲葉 章・中川 敦史 訳）東京化学同人
「化学・生命科学系のための物理化学」（Raymond Chang 著、岩澤康裕・北川禎三・濱口宏夫 訳）東京化学同人
「マッカーリ・サイモン物理化学 上・下」（D. A. MaQuarrie, J. D. Simon 著、千原秀昭・江口太郎・斎藤一弥 訳）東京化学同人

オフィスアワー：水曜日（13:00～14:00）細胞機能学研究室

教員からの一言：高校で物理や化学を未履修の人は、「新しい高校物理の教科書」「新しい高校化学の教科書」（ともに講談社 ブルーバック）などで学ぶこと。意欲的な人は参考書としてあげた本も手許において自習してほしい。教科書およびCodexで配布する演習問題を解くことができることを目標とする。

統計学 Bio-Statistics

学 年 第2学年 科目分類 必修 前期・後期 前期 単 位 1.5

担当教員 東浦 康友

授業のねらい

この講義では生命科学における様々な生命現象を数値化し、説得力のあるデータとして提示するための方法論としての統計学を学ぶ。様々な実験から得られた数値の整理法、表現法としての統計学やさらには実験データの客観的評価法としての統計学を学ぶ。実験科学において基本的に用いられている解析法の原理と応用方法を実例を中心とした講義と演習の中で体得できるようにしたい。

授業内容

回数	項目	内容
1	序	統計学の歴史と意義
2	正規分布とその応用	平均値、分散、標準偏差
3	確率と理論分布	二項分布、正規分布、t-分布、ポアソン分布
4	統計学的推定	母平均の推定と信頼限界の求め方
5	統計的仮説検定	統計的仮説の立て方と帰無仮説の意義。仮説検定の手順。
6	2つの平均値の差の検定	t-検定とノンパラメトリック検定。
7	演習	平均値の信頼限界とt-検定、ノンパラメトリック検定。
8	3つ以上の平均値の差の検定	分散分析(1)
9	3つ以上の平均値の差の検定	分散分析(2)
10	3つ以上の平均値の差の検定	分散分析(3) 多重比較
11	演習	分散分析
12	相関係数と単回帰	二つの変量間の相関性を検討する方法。最小二乗法による直線回帰と二つの変数間の関係の予測。
13	割合(比率)の差の検定	カイニ乗検定。2×2表の立て方とその応用。
14	パソコンによる解析	統計プログラムSASの使用方法

成績評価方法：期末試験と授業中に行う小テストにより成績を評価する。

参 考 書：Jerrold H. Zar (2010) Biostatistical analysis. Prentice-Hall, New Jersey, USA.
石居進、生物統計学入門、培風館。

オフィスアワー：東浦 康友 前期 月曜日(17:00～18:00) 生態学研究室

教員からの一言：統計学を分かり易く、実例に添って講義する。単なる数学ではなくて、生命現象の本質を読むための手段として、活きた統計学を身につけて欲しい。

基礎生命科学実習Ⅱ

Practical Training in Basic Life Science II

学 年	第2学年	科目分類	必修	前期・後期	通 年	単 位	4
-----	------	------	----	-------	-----	-----	---

担当教員 宮川 博義、各教員

授業のねらい

生命現象を分子・オルガネラ・細胞・器官レベルで扱う生命科学分野では、ハイクラスの技術を駆使することが要求される。基礎生命科学実習Ⅱでは基礎的な専門技術の習得を目指しており、3年次の実習、さらに4年次の卒業論文実験へと発展する礎となる。実習は、自ら実験して体得することが必須であるが、その背景にある理論についても十分に理解することも重要である。

授業内容

【事前指導 実験を始めるにあたって】

実習を始めるに先立って、実験時の心得や注意すべきことを学ぶ。

回数	担当	項目	内容
1～4	太田・時下	微生物の培養	微生物の増殖過程を定量する実験を通して、微生物を取り扱う上での基本的操作（滅菌、無菌操作など）を習得する。
5～8	伊藤・小林	マンデル酸の光学分割	キラルな分子であるマンデル酸のラセミ体を用い、化学的手法や酵素を用いて両鏡像異性体を分割する。 これにより、分子の立体化学と鏡像異性体同士の性質の違い等について理解を深める。
9～12	藤原(禎)・内田・青木・宮川(博)・森本・上川内	緩衝液とpH・吸光度法	酸・塩基の滴定曲線を作成し、酸・塩基滴定法を学ぶと共に、酸解離平衡及びpH 緩衝作用を理解する。 吸光度法の原理を理解し、吸光度と色素濃度との関係を示す検量線を作成し、食品試料中の色素を定量する。さらにFe(Ⅱ) - o-フェナントロリン錯体の生成反応により飲料中の鉄を定量する。
13～14	太田・志賀	酵素誘導	微生物はさまざまな生育環境の変化に適応して効率よく増殖するために、その生育環境下で必要とする生体成分の合成を優先的に行い、不必要な成分の合成を抑制している。本実験では、遺伝子の発現調節機構が詳しく研究されているβ - ガラクトシダーゼとアルカリ性ホスファターゼの誘導と抑制を実際に観察し、その調節機構について考察する。
15～16	山岸・横堀・森河	コンピュータを用いたDNA配列の解析	生命科学の分野ではゲノム、DNA、タンパク質の配列や構造情報の検索及び解析、文献の検索や入手について、インターネットの使用が不可欠である。本実験では、インターネットを介したDNA配列のホモロジー検索とそれに関連した文献の検索を行う。また、このようにして得られたDNA（またはタンパク質）配列の解析の大半は、コンピュータを用いて行われる。本実験では、そのようなコンピュータを用いたDNA（タンパク質）配列の解析を行い、バイオインフォマティクス研究の一端に触れる。
17～20	高橋(勇)・高橋(滋)・中野	脂質の抽出と分離と定量	クロロホルムとメタノール混合溶媒を用いて脳及び卵黄より全脂質を抽出し、脳のアセトン抽出液からコレステロールを精製する。抽出した各種脂質を薄層クロマトグラフィーにより分離・同定する。
21～24	都筑・藤原(祥)・佐藤・岡田	プロトプラスト・光合成	植物葉の構造や細胞への理解を基本的な目的とし、また植物を用いた研究や植物細胞工学の材料として用いられるプロトプラスト (protoplast: 原形質体) について理解する。
25	高橋(勇)・高橋(滋)・梅村	前期演習	

Ⅱ
2年次科目

必修総合科目

必修専門科目

選択総合科目

選択専門科目

自由科目

教職科目

回数	担当	項目	内容
26～27	宮川(博)・森本・井上(雅)	神経系薬理	自律神経系は生体の恒常性維持の制御を行うシステムであり交感神経系と副交感神経系とからなる。交感神経系は神経終末からアドレナリンを、副交感神経はアセチルコリンをそれぞれ放出する。腸管は二重支配を受けると共に、固有の腸神経系も有しており、複雑な神経性制御のもとに機能している。本実習では、モルモット腸管の収縮に対するアセチルコリン受容体アゴニストおよびアンタゴニストの作用を調べることにより、自律神経系による調節機能の理解を目指す。
28～30	深見・中村・佐藤(礼)	酵素反応速度論	初期の酵素反応速度論の代表的研究にMichaelisとMentenによる研究がある。その研究対象の中心となったインベルターゼを用い、酵素反応速度論の基礎を学ぶ。
31～33	谷・馬場	ミトコンドリアのATPase活性測定	ラット肝臓よりミトコンドリアを単離し、垂ミトコンドリア顆粒を調製し、ATP合成酵素の活性を測定する。
34～35	田中(正)・浅野・西舩	免疫	(計画中)
36～37	多賀谷・田中(弘)・井上(弘)・古野	マイクロピペットの定量	(計画中)
38～41	渡部・伊東	医療計測	血液型、血液沈殿速度・出血の時間測定、血清タンパク質濃度の測定、血清タンパク質分画
42～45	濱田・内田・福原	新規実習	(計画中)
46	谷・馬場	後期演習	

成績評価方法：各パートのレポートや演習、出席日数、実習態度などにより総合的に評価する。

教科書：基礎生命科学実習Ⅱ 2011年版 東京薬科大学生命科学部編

特記事項：レポートは翌週の指定された時間までに提出すること。

2週間以上遅れたレポートは受け取らない。

レポートの未提出はその実習を欠席したものとみなし、全体の単位を認定しないこともある。

教員からの一言：実習で何をするのか、良く予習しておくように。また、結果は各自がノートに記録すること。

スポーツⅡ（体育実技） Sports II (Physical Education)

学 年	第2学年	科目分類	選 択	前期・後期	後 期	単 位	1
担当教員	武井 大輔（主担当）、中山 恭一						

授業のねらい

現代社会は、一方では「ストレス社会」とも言われる程、我々の日常生活を脅かす要因が多いことも事実である。その中であって健康を維持し、さらに増進させるためには、バランスのとれた栄養摂取と疲労回復のための休養、そして適度な運動が必要不可欠な要件である。スポーツⅡは、生涯健康である為に、楽しい身体活動を通して、体力の保持・増進及びコミュニケーション能力を学ぶことを目的とした、実技中心の科目である。

授業内容

回 数	担 当	内 容
1	武井・中山	ガイダンス及びクラス分け→男女共通（体育館）
2～8	男子→武井 女子→中山	男子→ソフトボール（グラウンド） 女子→バレーボール（体育館）
9～14	//	男子→サッカー（グラウンド） 女子→バドミントン（体育館）

授業で行っている工夫：楽しむためのゲームが中心です。そのために、効果的及び効率的なウォーミングアップを実施しています。

成績評価方法：出席、受講態度により評価する。

教科書：なし。

参考書：定めなし。

オフィスアワー：武井・中山 木曜日午後1時10分～午後1時50分
生命科学部体育・スポーツ研究室 授業実施日のみ

特記事項：履修概要：

*スポーツⅡは、男女別に学内施設を利用して数時間ずつ実施する（原則として男子はグラウンド、女子は体育館）。

*各種目、基礎技術を習得し、ゲームを中心に実施する。

*実施種目は、天候または利用施設の状況により、予定とは変更する場合がある。

実施可能種目

（グラウンド）サッカー・ソフトボール

（体育館）バドミントン・フットサル・バスケットボール・バレーボール・卓球・ユニホック・ミニテニス

原則：

1.各コースの定員は次のようになっている。A、B、C、D、E、Fコース各20名程度

2.原則として各期には1コースしか受講できない。

3.教員免許取得希望者は、必修科目となるので、スポーツⅠとあわせて必ず選択すること。

4.詳細は第1回の授業時に説明する。第1回の授業が履修申請となるので必ず出席すること。

コースの分け方

1限A、Bコース各20名程度、2限C、Dコース各20名程度、3限E、Fコース各20名程度

*受講上の注意点：運動にふさわしい服装・シューズを着用すること。

教員からの一言：安全第一に、ルールを守って積極的に参加して下さい。スポーツを楽しみましょう。

English and Life Sciences in the USA

English and Life Sciences in the USA

学 年	第1～4学年	科目分類	選 択	前期・後期	集 中	単 位	2
担当教員 甲斐 基文							

授業のねらい

生命科学部海外特別研修は、学部教育の一環として、世界で通用する人材の育成を目指しています。従って、研修プログラムの柱は国際語である英語を使わなければ生活できない場に学生を置き、生命科学を学ぶ上で必要な英語の運用力の向上を図ると共に、英語で生命科学を学ぶことを実体験することにあります。研修はアメリカ人家庭に入り、ホームステイをしながら、大学においてESL（英語研修）を行ないます。他に生命科学の特別レクチャー、生命科学関連の企業、大学LAB訪問、小旅行、自由時間など自分の目で見、自分の頭と心で考え、感じ、自分で責任もって行動する場もあります。英語圏の人々や文化に触れることにより、視野の広い、自立した社会人としての第一歩を踏み出してもらいたいと思います。

授業内容

回 数	内 容
1	オリエンテーション&プレストメントテスト
2～19	<ol style="list-style-type: none"> 1. ESL(English as a Second Language) クラスによる授業：アーバインでの生活慣習、カリフォルニア州についての基礎知識、生命科学レクチャーの準備等に関する英語の授業 2. 生命科学分野の専門レクチャー 3. 研究施設訪問：UCI 附属研究所、生命科学関連企業等 4. Conversation partners との英語セッション 5. 文化施設訪問：博物館等

成績評価方法：本学部が企画したこの研修を受け、カリフォルニア州立大学アーバイン校から修了証書を受領した学生に対して、English and Life Sciences in the USAとして本学部が単位認定をします。

オフィスアワー：甲斐教授 火曜日（13:00 - 14:00）言語科学研究室 教授室

特記事項：前期に数回、研修前事前研修として、ネイティブスピーカーによる授業を数回予定しているため、必ず参加のこと。なおこの授業はすべて英語で行われます。

教員からの一言：この機会を積極的に活用して、英語力のみならず、自分の世界を広げてほしいと思います。

分子医科学概論

General Course on Molecular Medical Science

学 年	第2学年	科目分類	選 択	前期・後期	後 期	単 位	1.5
担当教員	柳 茂 (主担当)、谷 佳津子、松下 暢子、浅野 謙一、内田 宏昭						

授業のねらい

分子レベルのさまざまな現象は主として細胞を舞台として起きており、多数の細胞と器官から構成された生物体（人体）は全体と部分との間の巧妙・精緻なコミュニケーションにより、全体として統一ある有機体として働く。遺伝子の異常などによりこのバランスが崩れたときに疾患が発症する。人体の全体像と個々の破綻による疾患との関連性を学習するために、4人の担当者がそれぞれの専門分野から神経疾患や癌を中心にさまざまな疾患を取りあげて、それらの分子病態や現在の治療法について解説する。これらの一連の講義を通じて正常と異常として病態の理解と今後の医療の問題点を把握し、これからの生命科学研究の取り組みについて考察する。

授業内容

回数	担当	項目	内容
1	柳	癌遺伝子研究概論	癌遺伝子研究の歴史と展開
2	//	脳疾患概論	神経変性疾患、精神疾患の病態と治療
3	//	精神疾患概論	統合失調症の病態と治療
4	松下	ゲノムの不安定性とその修復機構	染色体不安定性を引き起こす遺伝性疾患とその分子メカニズム
5	谷	慢性骨髄性白血病	がん遺伝子 Bcr - Abl の発見から分子標的薬の開発までを解説する
6	内田	腫瘍医科学入門	癌の診断と治療
7	//	癌の生物学①	増殖因子シグナル伝達と癌遺伝子
8	//	癌の生物学②	細胞周期とアポトーシス
9	//	癌の生物学③	増殖の抑制と癌抑制遺伝子
10	//	癌の生物学④	癌転移のメカニズム
11	//	癌の新規治療法①	癌の遺伝子治療・免疫療法
12	//	癌の新規治療法②	癌のウイルス療法
13	浅野	細胞死と自己免疫疾患	細胞の死骸を放置すると何が困るのか解説する
14	//	細胞死とがん	がんをうまく攻撃するためには何が必要か考えてみる

成績評価方法：レポート提出および出席状況により成績評価を行う。

教科書：必要に応じて授業前にプリントを配布する。

参考書：必要に応じて紹介する。

オフィスアワー：柳 茂 講義終了後 分子生化学研究室

松下 暢子 後期 火曜日 (13:00 ~ 14:00) 分子生化学研究室

谷 佳津子 後期 火曜日 (13:00 ~ 14:00) 細胞情報医科学教授室

内田 宏昭 講義終了後 腫瘍医科学研究室

浅野 謙一 講義終了後 免疫制御学研究室

教員からの一言：分子、細胞レベルの知識をより实际的にヒトで理解できるように、医学的な立場から機能及び疾患を概説する予定で基礎医学、臨床医学的教育の経験を生かし医学への興味を引き出すような講義を心がけますので、一緒に楽しんで学問しましょう。

II
2 年次科目

必修総合科目

必修専門科目

選択総合科目

選択専門科目

自由科目

教職科目

環境衛生学 Environmental Hygienics

学 年 第2学年 科目分類 選 択 前期・後期 後 期 単 位 1.5

担当教員 藤原 祺多夫 (主担当)、太田 敏博

授業のねらい

人間活動の影響は、地球の様々な地域の環境問題に関わっている。前半の講義(1～8、藤原)ではこうした環境問題を、特に化学の立場から理解すると共に、汚染化学物質の生成、地球上での循環について解説する。

後半の講義(9～14、太田)では食品に含まれる様々な化学物質の安全性の評価法について、具体例を示しつつその手法と問題点について解説する。

授業内容

回数	担当	項目	内容
1	藤原	地球環境についての問題提起	
2	//	酸性雨	その実態と雨水酸性化のメカニズム
3～4	//	地球の温暖化	地球温暖化のメカニズムと温暖化気体の作用
5～6	//	成層圏オゾン層の破壊と紫外線増大の影響	
7～8	//	化学物質による環境汚染	大気環境
9	太田	食品の安全性の考え方	化学物質の無毒性と閾値の概念
10	//	残留農薬のリスク評価	無毒性量 (NOAEL) と一日摂取許容量 (ADI)
11	//	残留農薬のリスク評価	不確実係数と残留基準値の設定
12	//	残留農薬のリスク評価	ポジティブリスト制度
13	//	化学物質のリスク評価	遺伝毒性と発がん性
14	//	食品添加物のリスク評価	合成添加物と天然添加物

授業で行っている工夫：(藤原)教科書を使わないので、必要に応じて授業中にプリントを配布する。板書が主体である。(太田) Power Point を使って進めますが、ノートを取る時間は十分に設け、ほとんどの学生が写し終わってから解説をするようにしています。図表はCodexで配布します。

成績評価方法：期末試験

教科書：なし

参考書：なし

オフィスアワー：藤原 月曜日 15:00～16:00 環境衛生化学研究室
太田 金曜日 講義終了後 講義室

所属教室：藤原 (環境衛生化学研究室)、太田 (環境分子生物学研究室)

教員からの一言：(藤原)環境化学の立場から、地球環境問題を、できるだけわかりやすく解説する。(太田)食品の衛生、安全性に対する一般の関心は高いが、その科学的根拠についての知識は普及していない。講義では最新の事例をもとに現状と問題点を考えたい。

環境汚染源化学 Chemistry of Environmental Pollutant

学 年	第2学年	科目分類	選 択	前期・後期	後 期	単 位	1.5
担当教員 天川 裕史							

授業のねらい

我々は様々な元素や化合物、即ち化学物質に取り囲まれ生活を営んでいる。そのような化学物質の中にはフロンのように産業の発達に伴い大量に使用された結果、環境に放出され人類に対し悪影響をもたらすものも数多く存在する。また、人類の活動を支えるエネルギーの代償として大量の二酸化炭素が大気に現在放出されており、それが地球温暖化に代表される気候に関わる諸問題の引き金となることが懸念されている。この授業では過去から現在に至る無機元素、無機化合物に関する環境汚染の事象に焦点を当て、そうした化学物質が地球表層上でどのような挙動を示すか地球化学的な見地から解説する。そして、広い意味での「環境汚染」に関する理解を深めることを目的とする。

授業内容

回 数	担 当	項 目	内 容
1	天川	ガイダンスおよび環境問題	本授業に関するガイダンスを行う。また、無機元素、無機化合物に関する環境汚染とは何か解説する。
2	〃	地球の形成	我々に「環境」の場を提供する地球がどのように形成されたか解説する。
3	〃	岩石圏における元素分布	地球の岩石圏には様々な元素が存在するが、その多くは一般的な分布を示さない。元素はどのようなところに多く存在するのか、そしてその理由について解説する。
4	〃	海洋における元素分布	海洋（海水）にも岩石圏同様、様々な元素が存在するがその分布は海洋における各々の元素の挙動と深く関わっている。海洋における元素の分布の支配要因について解説する。
5	〃	過去の環境汚染	過去の無機元素、無機化合物に関する環境汚染について取り上げ、解説を行う。
6	〃	現在の環境汚染Ⅰ	現在進行中の無機元素、無機化合物に関する環境への放出および環境汚染について取り上げ、解説を行う。
7	〃	現在の環境汚染Ⅱ	現在進行中の無機元素、無機化合物に関する環境への放出および環境汚染について取り上げ、解説を行う。
8	〃	汚染の時代変化	天然には環境汚染の変化を時系列で記録している堆積物やサンゴのような試料が存在する。汚染の記録がどのような形で記録され、どのようなことがわかるのか解説を行う。
9	〃	放射性核種汚染Ⅰ	核実験や原子力発電所の事故などによって様々な放射性核種が環境へ放出されてきた。どのような放射性核種がどのように放出されてきたか、具体的な例を挙げ解説する。
10	〃	放射性核種汚染Ⅱ	核実験や原子力発電所の事故などによって様々な放射性核種が環境へ放出されてきた。どのような放射性核種がどのように放出されてきたか、具体的な例を挙げ解説する。
11	〃	大気中の二酸化炭素Ⅰ	大気中の二酸化炭素濃度は気候変動の要因の一つである。過去から現在に至るまでの大気中の二酸化炭素濃度の変化について解説する。
12	〃	大気中の二酸化炭素Ⅱ	大気中の二酸化炭素濃度はどのように制御されているか、地球表層の諸プロセスと関連づけ解説する。
13	〃	大気中の二酸化炭素Ⅲ	大気中の二酸化炭素濃度は産業革命以前もめまぐるしく変化していた。こうした状況下、人為起源の二酸化炭素の放出が気候変動どのような影響を及ぼしていたのか解説する。
14	〃	まとめ	授業の内容を振り返り、まとめとする。

成績評価方法：主として学期末試験により成績評価を行う。

教科書：特に定めなし

参考書：「チェンジング・ブルー」大河内直彦著 岩波書店（2008）

オフィスアワー：講義の終了後 非常勤控室

Ⅱ
2年次科目

必修総合科目

必修専門科目

選択総合科目

選択専門科目

自由科目

教職科目

応用数学 Applied Mathematics

学 年 第2学年 科目分類 選 択 前期・後期 前 期 単 位 1.5

担当教員 安藤 博利

授業のねらい

数式処理ソフト Mathematica は長い数式をコンパクトに整理したり、微積分を実行したり、代方程式や微分方程式の厳密解を求めたりあるいは数値的に解いたり、と様々な数式の処理を容易に実行してくれる。またグラフィック機能が充実しており3次元の立体図形も表示してくれる。本講義では、このような強力な機能をもつ Mathematica をツールとして援用しながら今まで学んだ数学を見直し、さらに生命科学への応用と高度な数学への導入を試みる。前半で Mathematica の基本的な使い方を説明した後、微積分、微分方程式、フーリエ級数などの解析学を扱う。時間が許す範囲で数理生物学の基礎となるカオスやフラクタルなどの非線形力学系への入門的な解説をする。

授業内容

回 数	項 目	内 容
1	Mathematica の基本操作の学習	操作方法、文法、コマンド、内部処理
2	多変数の微分 (1)	指数・対数・三角関数と微分の復習 (知識、計算方法)、グラフ表示
3	多変数の微分 (2)	グラフの概形の描き方 (高次導関数、極値や変曲点の計算、凸性)
4	多変数の積分 (1)	不定積分の復習 (知識、計算方法)、グラフ表示
5	多変数の積分 (2)	定積分の計算、定積分の応用、グラフ表示
6	テイラー展開	各種関数のテイラー展開、グラフ表示
7	組合せ論	二項係数、第 1・2 種スターリング数、ベル数、スターリングの公式
8	母関数の理論	Series コマンドを利用した組合せ論
9	特殊関数	調和数、ガンマ関数、ゼータ関数、特殊積分等、グラフ表示
10	無限積展開、無限部分分数展開	三角関数やガンマ関数等のグラフ表示
11	複素数	実部、虚部、四則、絶対値、関数値、オイラーの公式
12	整数論	主にガウス整数とウェアリングの問題、それと興味深い数論の話題
13	微分方程式 (1)	具体的な周期関数のフーリエ展開と一般論、グラフ表示
14	微分方程式 (2)	DSolve コマンドによる微分方程式の解、グラフ表示

成績評価方法：成績は、出席点と課題の点数で主に評価する。出席点については、実際に教室で受講していた時間から厳密に算出する予定である。よって遅刻はしないように。また課題は学生同士で協力して取り組んでもよいことにする。

教 科 書：Mathematica 利用による応用数学 1－数学編 林 昌樹、勝浦一雄、他著 東京薬科大学生命物理科学研究室

参 考 書：コンピュータ物理学 W. Kinzel and G. Reents 著 林 昌樹ら訳 愛智出版
Mathematica 利用による応用数学 3－非線形力学系・複雑系科学編 林 昌樹、他著 東京薬科大学生命物理科学研究室

オフィスアワー：安藤 博利 授業時間の前後 2107 コンピュータ室

教員からの一言：毎回の授業内容には非常に難しそうな数学の専門用語が並んでいますが、Mathematica を使えば、それらがより身近なものとして自然に受け入れられるようになるでしょう。また課題についても、高得点を獲得するよりも、取り組むこと自体に意義があるような内容を目指します。

生命と環境の科学 Topics in Environmental Life Science

学 年	第2学年	科目分類	選 択	前期・後期	後 期	単 位	1.5
担当教員	高橋 勇二 (主担当)、都筑 幹夫、太田 敏博、藤原 祺多夫、東浦 康友、時下 進一、志賀 靖弘						

授業のねらい

ヒトを含めた生物は、生存と子孫の繁栄に最も有利な場所を探し出し、生きています。また、地球に生物が誕生の後、それぞれの生物が特有の生存環境を選び出すことによって、ゲノム情報が多様化し、多くの種が地球上に誕生して、生物の多様性が形成されてきました。このように、生物は環境の影響を受けて、時に、環境に働きかけて、生命を維持しています。「生命と環境の科学」の講義では、環境を把握するための化学的な計測、分子から生物の集団までの広範囲な段階での環境と生物の相互作用、ゲノム情報の変化と環境との関わりを含めて解説することを試みます。また、私たち人間の健康や生活に密着した環境科学の課題についてもわかりやすく解説します。

授業内容

回 数	担 当	項 目	内 容
1	太田	I. 生命科学の中の環境の捉え方 1) 微生物	遺伝情報であるDNA塩基の化学的不安定性と、これを克服するためのDNA修復機構の特徴を高度好熱性細菌を例にとりて解説し、たくみな生物の環境適応機構を紹介します。
2	太田、時下	2) 微小生物	単為生殖を行っているミジンコの生殖細胞はどのような分裂をしているのか、棲息環境の悪化情報を受容した時、どのようにして単為生殖から有性生殖への移行がおこなわれているのか、遺伝子発現の制御メカニズムについて解説します。
3	太田、志賀	3) 微小甲殻類生物	現生の甲殻類(エビ、カニ、ミジンコ等) は多種多様な形をした生物群で構成されている。このような「形の多様性」が進化の過程でどのように成立してきたのかを遺伝子発現調節から解説します。
4	東浦	4) 生態系	生物同士の繋がりとバランスを考え、豊かな自然を保護する意義について考えます。
5	//	5) 種とは何か	生物は違った環境に適応し、新しい種も生まれます。種分化を現象的にも、分子生物学からも追求し、現代的に種を考えます。
6	高橋	6) ヒトや動物	ヒトを含めた動物が環境変化へ応答する機構と、環境ストレスへの応答機構の異常と病気の関連について解説します。
7, 8	//	II. 生命科学の中のゲノム生態学という領域	ゲノム情報を用いた生物群集の理解と生態系保全について考えます。
9	藤原	III. 生命科学への化学的アプローチ 1) 有機化合物	私達の身の回りには化学物質があふれています。有益なものもあれば有害なものもあります。ましてや身体に取り込まれた化学物質が子供や孫の代まで悪影響を及ぼすことが明らかとなっています。これらについて解説し、環境リスクと私達のつきあい方を学びます。
10	//	2) 化学分析	二酸化炭素や成層圏オゾンなどの地球環境に影響を与える化学物質の計測法を解説します。
11	//	IV. 生命科学の中の環境フロンティア化学という領域	地球誕生、生命の発生、気候変動及び現在の環境問題について、化学の立場から解説し、現在世界で行われている環境研究の最先端(フロンティア)を説明します。
12	都筑	V. 生命科学と地球環境との関わり 1) 進化と多様性:	生命誕生からの地球の歴史を理解するには、生命科学の最先端知識が不可欠になっています。生物の進化と多様性について理解し、生命科学の発展とのつながりを解説します。

回数	担当	項目	内容
13	都筑	2) エネルギーと物質循環	地球のエネルギーと物質循環にヒトや生物が大きな役割をもっています。その実態を理解し、生命科学からの保全のアプローチを説明します。
14	//	VI. 生命科学の中の環境ゲノム学とその他の領域	生命科学の中の環境ゲノム学の世界を説明し、その他の領域とのつながりを解説します。

成績評価方法：出席、レポート、試験により成績評価を行う。

参 考 書：講義の中で参考となる資料を紹介する。

オフィスアワー：都筑 火曜日（13:10～14:00 その他も随時可） 環境応答生物学研究室

高橋 金曜日（17:00～18:00） 環境ストレス生理学研究室

太田、時下、志賀 月曜日（17:00～18:00） 環境分子生物学研究室

藤原 月曜日（15:00～16:00） 環境衛生化学研究室

東浦 月曜日（17:00～18:00） 生態学研究室

教員からの一言：教員が持ち味を生かし、生命と環境の科学を論じます。

地学実習

Practical Training in Geological Sciences

学 年	第2学年	科目分類	自 由	前期・後期	前期 (集中)	単 位	1
担当教員	山岸 明彦						

授業のねらい

地学関連の講義（進化系統学、地球環境論）に基づき、宇宙、銀河系、太陽系、地球および生命の起源と歴史に関する知見と方法論を、科学博物館、野外観察等を通じて実地に体験、学習することを目標とする。授業では、まず全員に対して課題と科学博物館や野外観察の場所、それぞれの場所での観察の目的、特徴、報告すべき内容、野外観察を行う上での注意の説明を行う。実際の実習は各自の予定に従い、休日や夏休み期間中に自主的に行う。夏休み終了時に、野外観察の内容、結果、考察を纏めたレポートを提出する。

授業内容

実習計画は自主的に作成するため、各回の内容は規定しないが、学習内容に含めるべき項目として以下のものがある。

回 数	項 目	内 容
1	宇宙の歴史に関して	宇宙の誕生、宇宙の大きさ、それを調べる方法、宇宙の構造
2	銀河系に関して	銀河とは何か、銀河の大きさ
3	太陽系に関して	太陽系の誕生、現在の太陽系、他の惑星の特徴と太陽系形成過程の関係
4	初期地球に関して	地球の誕生と歴史、初期地球環境に関して
5	生命の歴史と地球環境の関連	シアノバクテリアの誕生と酸素発生、酸素の蓄積と縞状鉄鉱床の形成、地質時代と生物界の変遷、ダーウィニズム、大量絶滅、植物動物の進化
6	現在の地球と物質循環	地殻変動と物質循環、海底熱水系と細菌の生態系、環境変動とその要因

成績評価方法：野外活動のレポート提出を受け、評価する。

教科書：プリントを配布する。

参考書：プリントで適宜紹介する。

オフィスアワー：7階細胞機能学研究室で確認すること

生命科学特別演習

Life Science Training Course for the Gifted

学 年	第2・3学年	科目分類	自 由	前期・後期	通 年	単 位	1
-----	--------	------	-----	-------	-----	-----	---

担当教員 多賀谷 光男（主担当）、各教員

Ⅱ 2年次科目

必修総合科目

必修専門科目

選択総合科目

選択専門科目

自由科目

教職科目

授業のねらい

学部の授業だけでは飽き足らないという、特別に学習意欲が強かつ成績優秀な学生のために設けた少人数特別クラスである。学部の2・3年生という早い時期に、研究室に配属し、実際の研究活動に触れる「研究の早期体験（Early exposure）」である。ただし、通常の授業時間外の午後5時以降の夜間や週末、祝祭日など休日を利用して行われるので、履修する学生の負担も大きい。また、教員や研究室にとっても負担が大きいので、履修を希望するに当たっては、これらの点を十分に考慮して履修が継続できるか、学習の負担に耐えられるか十分に熟慮すること。大学院飛び入学希望者は特別演習を受講しておくことが望ましい。

授業内容

内容は研究室毎に異なるが、1. 大学院修士課程レベルの高度な内容の英文論文の論講および2. 独立したテーマを持ち、それについてオリジナルな研究を行うことを標準としている。過去においては、その成果を学会において講演者として発表した受講生も少なくない。

成績評価方法：積極性、習熟度などにより総合的に評価する。

特記事項：生命科学部の全教員が参加するとは限らないので、希望しても本授業を行わない研究室もある。また、履修は、成績上位の学生に限られる。成績が達しないで、正規の履修とならなくても、同様な教育を実施する研究室もあるので、希望者は予め教員に相談しておくこと。

教育原理 Principles of Education

学 年	第2学年	科目分類	教 職	前期・後期	前 期	単 位	2
担当教員 木村 清治							

授業のねらい

これから教師になろうとする者のために、教育とは何かについて、大略を理解してもらうのが本講義の目的である。教育の語義から始めて、人間と教育、教育の目的は何か、教育の形態にはどのようなものが存在するかなどについて説明する。「教育」とは何かについて、自分なりの考え方を持ってもらいたい。

授業内容

回 数	項 目	内 容
1	教師像の変遷	
2	狼に育てられた人間	狼に育てられた子供たちを紹介し、教育とは何かを考えていく。
3	教育の語源	教育の意味
4	動物としての人間 (1)	シェーラー、ゲーレン、ポルトマンらの説を紹介して教育を考える。
5	動物としての人間 (2)	シェーラー、ゲーレン、ポルトマンらの説を紹介して教育を考える。
6	教育目的の特殊性	
7	西洋の古代・中世における教育の目的	
8	西洋の近世における教育の目的	
9	西洋の近代における教育の目的 (1)	
10	西洋の近代における教育の目的 (2)	
11	現代の教育目的論 (1)	児童中心主義教育論 (1)
12	現代の教育目的論 (2)	児童中心主義教育論 (2)
13	現代の教育目的論 (3)	反児童中心主義教育論
14	現代の教育目的論 (4)	エッセンシャルイズムの教育目的論 (1)
15	現代の教育目的論 (5)	エッセンシャルイズムの教育目的論 (2) 現代の日本の教育
16	現代の日本の教育	
17	まとめ	

成績評価方法：主として学期末試験により成績評価を行う。

参 考 書：古垣 光一編著『教育の基礎・基本』くらすなや書房

オフィスアワー：授業の前後

教育行政学 Educational Administration

学 年 第2学年 科目分類 教 職 前期・後期 前 期 単 位 2

担当教員 木村 清治

授業のねらい

教育は、つき詰めればその成果は教師の力量次第といえる。しかし、どんなに有能な教師がどんなに優れた内容の教育を行おうとしても、そのための舞台、すなわち教育条件が整っていなければ、よい教育は行い得ないのは当然である。教育行政は、いわばその舞台を整えることを使命とし、教育行政学はその教育の舞台の整え方を考える学問である。わが国の教育行政などを学び、教育とは何かを考えてもらう。

授業内容

回 数	内 容
1	教育行政の意味、教育行政の変遷
2	教育行政と教育法規
3	教育行政争訟と教育裁判
4	現行教育行政の理念と仕組み、中央教育行政の組織と機能
5	地方教育行政の組織と機能、教育行政の組織と運営に関する問題
6	教師と学校教育、教育の本質と学校制度
7	公教育制度の理念
8	学校制度と学校の種類、学校教育の目的・内容・教材
9	学校の組織と運営
10	教師の歴史と現段階、教師の養成制度と免許制度
11	教師の任用と身分、教師の権利と義務
12	教育内容への国家関与
13	学校の管理・運営に関する論争、教師の労働基本権に関する論争と論点
14	教育権に関する論争と論点
15	学校教育の量的発展と学校の機能、社会変化と教育、障害児と教育
16	国際化と学校の在り方、教育改革の動向と課題
17	まとめ

成績評価方法：課題レポート、発表、出席状況を前提に、定期試験など総合して評価する。

教科書：高橋靖直編 教育行政と学校・教師〔第三版〕 玉川大学出版部

参考書：姉崎洋一他編 解説教育六法 2009年版 三省堂、三輪定宣編著 教育行政学 八千代出版

オフィスアワー：授業の前後

教育課程研究 Research of Curriculum

学 年	第2学年	科目分類	教 職	前期・後期	前 期	単 位	2
担当教員 木村 清治							

授業のねらい

学校は意図的・計画的に教育を行う専門機関であるので生徒たちがそこで学ぶべき教育内容は教育の目標に照らして意図的に準備され、子供の発達段階や興味・関心などを考慮して計画的に学習できるように組織されている。このように、教育目標を達成させるために教育内容を計画的に組織し配列して一貫した体系に編成したものが「教育課程」である。これを各学校は主体性を発揮し、各学校の運営組織を生かし、各教師の創意工夫を加え編成されねばならない。教師の果す役割について講義する。

授業内容

回 数	項 目	内 容
1～4	教育課程の意味とその編成の歴史	「教育課程」は何かを理解し、教育課程の誕生時から現在までの変遷について学ぶ。
5～8	教育課程の構成原理と学習指導要領 学習指導要領の「総則」と「理科」	教育課程の構成原理としては(1)教育の本質的要請、(2)国家・社会からの要請、(3)生徒たちの必要、要求、発達からの要請などが考えられ、これらの詳細な内容について考えてみる。また、学習指導要領とはいかなるものかについても詳しく説明する。学習指導要領の「総則」と「理科」の項目について特に詳しく講義する。
9～12	教育課程の管理	教育課程の管理の責任は校長にある。校長は教育課程の編成の方針を明確にして指導の重点を決め、教職員を指導し、教育活動を活発にするよう、創意工夫をしなければならぬ。そのために校長は一般教員とのパートナーシップを重んじ、節度あるリーダーシップを発揮することが求められる。こういう中で一般教員の果す役割、校長の果す役割について、深く考えてみたい。
13～16	新教育課程の特徴 小学校・中学校・高校における理科の教育課程	小学校、中学校そして高等学校の新教育課程の特徴を旧教育課程と対比しながら説明する。
17	まとめ	

成績評価方法：講義への出席、講義中に与えたテーマに対するレポートの提出、講義終了時に与えたテーマに対するレポートの提出により評価する。

教科書：高等学校学習指導要領 これ以外は適宜プリントを作成し配布する。

参考書：中学校学習指導要領

オフィスアワー：講義終了後一時間 生命科学部5F教育課程研究室

教員からの一言：この講義を通して、学校教育に対して「教育課程」がいかに重要なものであるかを把握してもらえれば幸いである。

道徳教育の研究 Research of Moral Education

学 年 第2学年 科目分類 教 職 前期・後期 後 期 単 位 2

担当教員 木村 清治

授業のねらい

道徳は、人間社会の秩序維持に大きな役割を担っている。しかし、道徳とは何かと問われると、はたと困ってしまう人が多かろう。道徳とは何か、またその教育について、さまざまな方面から考える。本講義によって自分なりの道徳観を確立するように希望する。

授業内容

回 数	項 目	内 容
1	「道徳性」とは何か	道徳を考える時に、人間の道徳性が問題になる。そこで、この道徳性とは何なのかを考える。
2	「道徳」の意味 (1)	「道徳」の語源、「道徳」の概念等について考える。
3	「道徳」の意味 (2)	「道徳」の語源、「道徳」の概念等について考える。
4	「道徳」の意味 (3)	「道徳」の語源、「道徳」の概念等について考える。
5	道徳の本質 (1)	道徳の解釈の時代による変遷から見た、「道徳」の本質とは何か、について考える。
6	道徳の本質 (2)	道徳の解釈の時代による変遷から見た、「道徳」の本質とは何か、について考える。
7	道徳の本質 (3)	道徳の解釈の時代による変遷から見た、「道徳」の本質とは何か、について考える。
8	カントの道徳論 (1)	ドイツの近代哲学の大成者であるカントの道徳論を説明する。
9	カントの道徳論 (2)	ドイツの近代哲学の大成者であるカントの道徳論を説明する。
10	ペスタロッチの道徳論	スイスの教育家であるペスタロッチの道徳論を説明する。
11	デューイの道徳論 (1)	アメリカの哲学者・教育学者で、プラグマティズムの代表的人物であるデューイの道徳論を説明する。
12	デューイの道徳論 (2)	アメリカの哲学者・教育学者で、プラグマティズムの代表的人物であるデューイの道徳論を説明する。
13	周囲原因論・健康原因論	道徳性の規定要因や発達要因を、人間の周囲や健康に求める説を紹介する。
14	コールバーグの発達段階説 (1)	人間の成長にしたがって道徳性が発達するとするコールバーグ説を紹介する。
15	コールバーグの発達段階説 (2)	人間の成長にしたがって道徳性が発達するとするコールバーグ説を紹介する。
16	道徳教育	
17	まとめ	

成績評価方法 主として学期末試験により成績評価を行う。

教科書 特になし。

参考書 文部省編『中学校指導書・道徳編』（大蔵省出版局）など。

オフィスアワー 授業の前後